EAJS2017
15th International Conference of the European Association for Japanese Studies
Lisbon, 1 September 2017
S10−18

A Study of the Development of the Speaking Ability in Two Languages of the Culturally Linguistically Diverse Children in Japan

日本で多言語環境に育つ年少者の話す力の二言語調査

Junko Majima (Osaka University)
Chiho Sakurai (Doshisha University)

日本で育つCLD児

CULTURALLY
LINGUISTICALLY
DIVERSE CHILDREN
文化的言語的に多様な背景を持つ子ども

学校や外では日本語（現地語）、家庭内では母語（親の言語）が主に使われる環境で育つ。

「21世紀の課題は、どれだけ加算的バイリンガル（additive bilingual）の子どもを育てられるかだ」
Lambert 1977

日本語の教育を行う過程で、それまでに身につけた母語をなくさない「二言語教育」が望ましいと考える
→「何も無くさない日本語教育」をモットーに

→成人とは違って発達段階の途中にいるCLD児の場合、二言語能力の実態調査が必要

日本語指導が必要な児童生徒への支援に活用

調査全体の概要

平成21年度～平成23年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号21610010 代表：真嶋潤子
「日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から再構築する試み」
平成 24 年度～平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号 24320094 代表：真嶋潤子
「外国人児童生徒の複数言語能力の縦断的研究－何もなくさない日本語教育を目指して－」
平成 25～27 年度科学研究費補助金特別研究員奨励費 課題番号 3J40029 代表：櫻井千穂
「言語的マイノリティの子どもの二言語リテラシーの習得研究」 ほか

- 調査期間：2005年～2016年
- CLD児童生徒（主に中国，南米西語圏ルーツ），日本語母語話者児童生徒
- 調査地：大阪，兵庫，東海地域
- 対話型アセスメント「話す」「読む」（DLAの前身）

外国人児童生徒のための JSL対話型アセスメント

文部科学省委託事業（2010-2012）「外国人児童生徒のための総合的な学習支援事業」における「日本語能力の測定方法の開発」（東京外国語大学留学生日本語教育センター 受託）

Dialogic

Languag

Assessment（アセスメント）

・カナダ日本語教育振興会（2000）『バイリンガル会話テストOBC Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children』

文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

調査方法：二言語での実施

滞在年数・暦年齢を考慮しながら進める

〈はじめの一歩〉導入会話 語彙力チェック

〈話す〉
基礎タスク「日課」
認知タスク「お話」
認知タスク「環境問題」

単文生成が難しければ、ここで終了

〈読み聞かせ口頭再生課題〉
中島・櫻井（2012）

読めない子どもはここで終了

読める子ども

〈読む〉
レベルに応じたテキスト

大まかな言語環境を把握

なぜこのような方法をとるのか

- 一対一の対話型アセスメントでわかること
  - ・言語能力
    - ❖母語力、年齢、入国年齢、滞在年数などによって一人一人の力が大きく違う
    - ❖一番早く伸びる会話力を使って、子どもの力を引き出す
    - ❖一人でできること＋支援を得てできること
  - ・子どもたちの性格や興味・関心・態度
  - ・家庭や学校での言語・学習環境
- 教育的効果子どもの「学びの機会」
  - ・「認め」、「待ち」、「ほめ」
    子どもの学習意欲・興味関心を高める
  - ・自信をつける、自己肯定感

本発表の目的

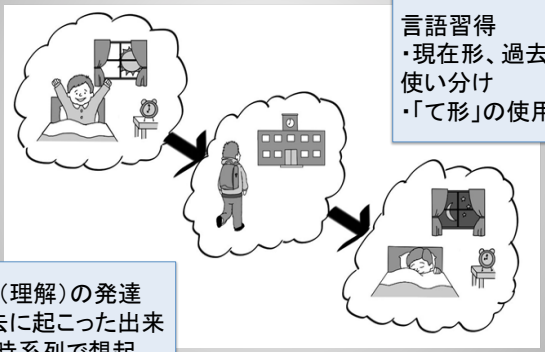
- 子どもの言語発達の基盤であり、読み書きの力につながる「（聞いて）話す力」に焦点
- 年齢に応じた発達と二言語の関係の一端を明らかにする

本発表の調査方法

- ＜はじめの一歩＞＜話す＞「日課」「お話」「環境問題」
- 小学1～6年生
  中国・南米西語圏ルーツCLD児131名,
  日本語母語話者児童56名(1学期終了時)
- 録音・文字化データを1～5点で評価

基礎言語面	認知面
発音・イントネーション	話の順序
基礎語彙	話のまとまり
単文生成力	概念把握・説明
文法的正確度	因果関係把握
文のタイプ・質	教科語彙

基礎タスク「日課」



言語習得
・現在形、過去形の使い分け
・「て形」の使用

認識(理解)の発達
・過去に起こった出来事を時系列で想起

認知タスク「お話」

言語習得と
認識(産出)の発達
・ディスコースの発達

認知タスク「環境問題」

言語習得
・教科学習語彙(概念を説明するための表現)の習得

認識(理解)の発達
・概念形成
・因果関係の把握

知識の獲得

結果1-1）：日本語母語児童

発音・イントネーション, 基礎語彙, 単文生成,
文法的正確度, 話の順序
→学年間の有意差なし→1年生の時点で発達している力

分散分析　　( )内は標準偏差, **p< .01. ***p< .001.

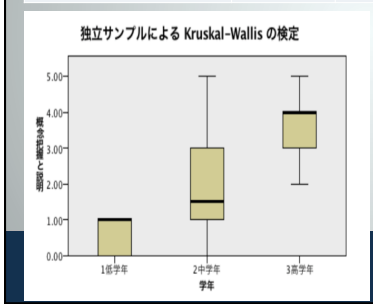
	低学年	中学年	高学年	F値	有意確率
文のタイプ・質	2.94 (0.52)	3.41 (0.62)	3.7 (0.57)	8.583	**
話のまとまり	3.05 (0.52)	3.17 (0.73)	3.9 (0.64)	10.165	***
因果関係把握	2.21 (0.71)	2.77 (1.09)	3.35 (0.81)	8.231	**

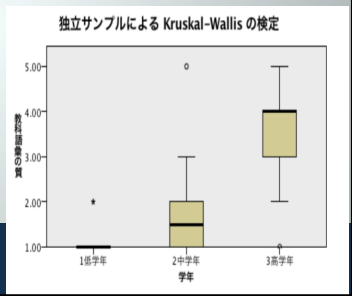
多重比較の結果、「話のまとまり」の低-中学年間以外、5%水準で有意差あり

結果1-2）：日本語母語児童

ノンパラメトリック（クラスカル ウォリス）検定

	平均値	標準偏差	$\chi 2$	有意確率
概念把握・説明	2.143	1.554	8.583	.000
教科語彙の質	2.161	1.345	10.165	.000





結果2：CLD児の母語と日本語の相関

基礎言語面		認知面	
発音・イントネーション	.119(.463)	話の順序	.338*(.033)
基礎語彙	−.288(.072)	話のまとまり	.243(.131)
文の生成	−.117(.47)	概念説明	.527**(.000)
文法的正確度	−.206(.203)	因果関係	.338*(.033)
文のタイプ・質	−.073(.652)	意見	.495**(.001)
		教科語彙	.187(.249)

*p<.05,　**p<.01

基礎言語面は相関なし, 認知面で中程度の相関

考察とまとめ

母語話者の話す力：
・1年生からディスコースができる
・4-5年生から概念統合、教科特有の知識の増加
　→ CLD児の話す力の診断の一つの目安

CLD児の支援：
・転移が起こる領域の力を伸ばす
・基礎言語面の力の習得に
　とらわれすぎないように

参考文献

カナダ日本語教育振興会 (2000)『子どもの会話力の見方と評価―バイリンガル会話テスト(OBC)の開発』
カミンズ, ジム著・中島和子訳著(2011)『言語マイノリティを支える教育』慶應義塾大学出版会
櫻井千穂(2016)「スペイン語母語児童生徒の二言語能力の関係―物語文の聴解・再生課題の分析を通して―」『日本語・日本文化研究』26号、大阪大学, pp.42-61
中島和子(2017)「継承語ベースのマルチリテラシー教育―米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状―」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』第13号 MHB研究会 pp.1-32.
中島和子・櫻井千穂 (2012)『対話型読書力評価』平成21～平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA(Dialogic Language Assessment)』
真嶋潤子(2016)「日本語を母語としない年少者への言語教育を考える―大阪府下の公立小学生への縦断的調査研究より―」『ことばと文字』 (5) 日本のローマ字社発行 くろしお出版発売 pp.104-115 .
真嶋潤子・櫻井千穂・孫成志(2013)「日本で育つCLD児における二言語とアイデンティティの発達ー中国語母語話者児童K児の横断研究より―」『日本語・日本文化研究』第23号 大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻 pp.16-37.
真嶋潤子・櫻井千穂 (2017)「CLD児の複数言語能力の関係について ―大阪府下の公立小学校での調査研究より―」『間谷論集』11号 日本語日本文化教育研究会 pp.41-56.

Cummins, J. (1979) Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research, 49,* 222-251.
Cummins, J. (1984). Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy. Clevedon: Multilingual Matters.
Cummins, J. (2009) Fundamental psychological and scociological principles underlying educational success for linguistic minority students. In T. Skutnabb-Kangas, R. Phillipson, A. K. Mohanty, & M. Pands (eds.) *Social Justice through Multilingual Education.* Bristol: Multilingual Matters. 19-35.
Lambert, W. E. (1977). The effects of bilingualism on the individual: Cognitive and sociocultural consequences. In P. A. Hornby (ed.), Bilingualism: Psychological, social and educational implications New York: Academic Press, 15-27.

ご静聴ありがとうございました。

真嶋潤子 ・ 櫻井千穂
jmajima@lang.osaka-u.ac.jp
sakurai12129@gmail.com